

自分の考えを深め、伝え合うことのできる児童の育成

—「話すこと・聞くこと」の授業づくりと系統的・段階的な指導の工夫を通して—

登米市立北方小学校 小野寺 紀子

1 はじめに

昨年度の登米市標準学力調査において、本校の多くの学年で国語科の「話すこと・聞くこと」の正答率が全国を下回っていた。児童に「話すこと・聞くこと」の資質・能力を確実に身に付けさせる必要があると考え、今年度は校内研究の主題を「自分の思いや考えを持ち、表現できる児童の育成」とし、国語科の「話すこと・聞くこと」の指導の工夫・改善を図っている。また、本市では「登米市学習スタンダード」を設定し、安心して考えを伝え合える学級づくりを行いながら、指導事項を明確化した授業を推進している。

本校と本市の取組を踏まえ、4年生28名を対象に行った話すこと及び聞くことの実態調査1回目においては、全員に話す際の言葉の抑揚や強弱、間の取り方の工夫の様子が見られないこと、7割の児童が必要な語句を記録することはできているが、半数の児童が話の要点を捉えられていないことが分かった。

2 研究の目的と方法

本研究の目的は、「話すこと・聞くこと」の指導の工夫を通して、自分の考えを深め、伝え合うことのできる児童を育成することにある。学習指導要領を踏まえ、「自分の考えを深め、伝え合うことのできる児童」とは、言語を手掛かりとして論理的に思考し、互いの立場や考えを尊重しながら言語を通して正確に理解したり適切に表現したりすることのできる児童と考える。

4年生28名を対象に、3つの手立てを用いて「話すこと・聞くこと」の授業づくりを行い、指導と評価の一体化を図る。また、4年生の授業づくりを起点として、学校全体で「話すこと・聞くこと」の系統的・段階的な指導を行っていく。

4年生を対象とした実態調査の比較、実践授業での児童一人一人の発話記録や観察から分析を行い、本研究の有効性を検証していく。

(1) 「話すこと・聞くこと」の授業づくり

① 手立て1 学びにつながる振り返りの場の設定と発問の工夫

授業の中で自分の話し方や聞き方を工夫・改善させていくために、自分や友達の話し方や聞き方について適宜振り返りの場を設定する。その際、本時の目標に達したかどうかを児童が確かめられる発問を

することで、自分や友達の話し方や聞き方から得られた気づきを生かして話し方や聞き方を工夫・改善させる。タブレット端末の録画機能を積極的に活用し、自分の話し方や聞き方を客観的に振り返らせる。

② 手立て2 可視化のためのメモの活用

児童が聞いた内容について言葉を根拠として正確に理解できるようにするため、音声言語を文字として記録し可視化させる。メモを基にして質問したり考えを比べたりすることで、児童が自分の考えを形成し深められるよう指導する。

③ 手立て3 身に付けさせたい資質・能力を指標とした見取りによる支援

どの児童にも「話すこと・聞くこと」の資質・能力を確実に身に付けさせるために、学習指導要領の当該学年の指導事項を基に、身に付けさせたい資質・能力を明確化し、細分化して指標を作成する。指標を基に、教師が授業の中で到達していないと判断した児童に適切な支援を行い、おおむね満足できる状況を目指して指導する。

(2) 学校全体での系統的・段階的な指導の工夫

① 「学びにつながる振り返りの場の設定と発問の工夫」の系統的・段階的な取組

学年部ごとの発問例を設定する。発問例を各学年の授業づくりに活用し、児童の発言や姿から発問例を修正していくことで、学校全体の「話すこと・聞くこと」の指導に生かしていく。

② 「可視化のためのメモの活用」の系統的・段階的な取組

低学年では、発問を基に、板書やワークシートを活用して可視化させる。中学年では、メモを取る目的を確かめ、単語や記号を使って工夫してメモを取るようにさせる。その後、メモの内容を基に話の内容や自分の考えを整理させる。高学年では、児童自らが目的に合わせて工夫しながらメモを取り、話の内容や思考を整理するようにさせる。

③ 「身に付けさせたい資質・能力を指標とした見取りによる支援」の系統的・段階的な取組

学年部ごとに作成した指標を、低学年から高学年まで一覧にし、系統表にする。指導事項ごとに前学年や次学年とのつながりが分かるようにし、系統性を意識して指導していく。指導事項が身に付いているかを確かめて指導に当たすることで、小学校6年間を通して「話すこと・聞くこと」の指導事項を確実に身に付けさせていくようにする。

3 実践検証

4年生での3つの手立てを用いた実践授業を基に、2年生と5年生でも担任が実践授業を行い、本研究の主題に迫ることができたかどうか検証した。

(1) 4年生の実践授業での成果と課題

7月	「話の中心を考えながら友達の話の聞こえ」 質問したり、メモを取ったりしながら話を聞くことを通して、聞きたいことの中心を聞き、自分の考えを持つ。
9月	「伝えたいな、わたしが成長したこと」 一番伝えたいことが聞き手に伝わるよう、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などを工夫して話す。
10月	「話の中心をはっきりさせて、調べたことをほうくしよう」 相手に分かりやすく伝えるために、話の中心を明確にして、話す順序など話の構成を考えて話す。

① 成果

各実践授業では、手立て1として振り返りの場を設定し、指標と関連した発問をした。主に「聞くこと」の単元では、「質問を工夫するとたくさんのことを教えてもらえた」「説明している立場のとき、詳しく尋ねる質問をされるともっと話したいと思う」など、全員が振り返りを生かして聞き方の調整を図っていた。「話すこと」の単元では、児童は自己評価や相互評価、抽出児童の話し方から気付いたことを、自分の話し方に生かしていた。具体的な表現方法や活用場面を押さえたことで、「嬉しかったことは、もっと笑顔で話したい」など自分の話し方を具体的に振り返っていた。また、内容とともに話の構成の仕方を工夫することが重要だと気づき、相手に伝わるように理由や事例を選び、話す順序を考えていた。振り返りを通して、より相手を意識し、話の中心が伝わるようにするための調整方法を考えていた。

手立て2として、児童はメモを活用することで、話し手の主張や応答内容を把握したり、聞き手の興味を引き付けるため話し方の工夫に気付いたりした。メモを取る目的を押さえ、記録の仕方を考えながらメモを取らせたことで、言葉を根拠に理解したり、自分の考えと比べたりしていた。

手立て3として、指標を基にした学習の目標を毎時間児童に提示したことで、教師と児童の間で目標の共有化を図ることができた。教師は見取りの観点が明確になり、目標に到達していない児童を見付け、具体的な支援を行うことができた。

② 課題

授業中の振り返りの際の自己評価で、児童に具体的な到達状況を理解させていなかったため、学びに生かせるような自己評価ができなかった場面があった。児童に目標を提示する際には、到達基準や比較できる複数の話し方のモデルなどを具体的に提示していく必要がある。また、児童がどんな場面でも伝え合うことができるようにするためには、表現を工夫しようとした過程や根拠、より相手に伝わりやすくする工夫などの児童の気づきを、更に深めるための振り返りの発問を工夫していく必要がある。

(2) 実態調査の比較及び実践授業後の児童の変容

話すことの実態調査2回目では、28名全員が目的を意識し、スピーチメモを活用して話の構成を考え、様子や気持ちを表す語句を工夫して話すことができていた。また、全員が相手を見て話しており、聞き手と応答しながら話す児童も8名いた。一方、言葉の抑揚や強弱を工夫して話していた児童は2割にとどまった。スピーチメモにも抑揚や強弱の記述が見られず、授業以外では抑揚や強弱を工夫した話し方への意識がまだ低いと考えられる。また、聞くことの実態調査2回目では、全員が必要な情報となる語句を押さえた回答ができており、話の中心を捉えられた児童は1回目の14名から27名に増えた。

実践授業後は、22名の児童が「話すこと・聞くこと」の学習を、他の教科等の学習や日常生活に生かしたいという意欲を持っていた。また、総合的な学習の時間や、算数や理科の学習で自分の考えを発表する際には、メモを活用して話の内容を理解したり、構成を意識した言葉を用いて説明したりしていた。児童は話の中心を捉えて自分の考えを持ったり、話の中心を明確にする話し方を工夫したりできるようになり、詳しく内容を理解することの楽しさ、伝わったことの達成感、もっと他の人にも伝えたいなどの思いを持ったことが感想などから確認できた。

(3) 学校全体での取組

全教師で4年生の実践授業を参観し、学習状況に応じた抽出児童の発話記録を基に、手立ての有効性を話し合った。その後、本研究の手立てを活用し、2年生と5年生で担任が実践を行い、系統的・段階的な指導の有効性について検証を行った。3つの手立てを用いることで、「教師と児童が目標を意識して学習を進めることができた」「授業の途中で振り返りを行うことで児童が学習の調整に必要な点に気付いていた」「系統表を活用することで、6年間の指導事項を意識して指導することができた」という点を確かめられた。発問については、発問表を参考にしながら、児童の実態に応じて授業者がそれぞれ発問を工夫していたことも確かめられた。

4 今後の方向性

次年度は学校全体で本研究の手立てを基にした実践授業に取り組み、各学年や各授業での成果と課題を検証していく。また、小規模校の良さを生かし、今年度実践した4年生児童について次年度も継続して実践を行い、手立ての改善を図りながら、更に自分の考えを深め、伝え合うことのできる児童の育成を目指していく。

【引用・参考文献】

- 1) 国立教育政策研究所：「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校国語、2020
- 2) 全国大学国語教育学会：新たな時代の学びを創る 小学校国語科教育研究、2019